

NPO法人



2018年12月10日

第40号

# Jomon Shiba



特定非営利活動法人

縄文柴犬研究センター

もくじ	1
シバの散歩道(最終回) ☆根深 誠(文筆家・釣り師・元登山家)	2
お便りコーナー「中秋紅夏姫(ノンノ)」の作出報告 ☆広島県 柳楽 倫	6
「広島に向井です」 ☆広島県 向井亮太	7
「始めまして」 ☆広島県 大名博子	8
「秋田県所への旅」 ☆石川県 土井下千明	10
「縄文柴犬ハナを迎えて」 ☆宮城県 高橋秀市	12
1993年のレポート狩猟犬としての縄文柴犬(3) ☆五味靖嘉	13
事務所報告 ☆新入会 ☆保存協力金 ☆犬舎登録 ☆仔犬登録	18
「アンケートの集約報告」 ☆ 五味靖嘉	18
「主な交流歴」(総会資料より)	24
「諸料金一覧」「血統登録について」	9



八ヶ岳(コンテ)  
五味靖嘉画

次号41号の原稿は、2019.1月末日までにお願ひします。皆様の投稿をお寄せ下さい。

・会費や寄附などをお寄せいただいた方の氏名・県名を掲載させていただきますが、匿名を希望される場合は、お知らせください。

本年度会費未納の方は、早めにお願ひ申し上げます。

**特定非営利活動法人 縄文柴犬研究センター**

郵便振替口座 : 02280-2-106951

会事務所 : 〒 014-0073 秋田県大仙市内小友字堂ノ前 119 番地 5 ☎ 0187-68-2976

<http://www.j-shibainu.sakura.ne.jp/>

[encounter\\_shiba@jomon-shiba.sakura.ne.jp](mailto:encounter_shiba@jomon-shiba.sakura.ne.jp)

## シバの散歩道 (通算 39 回最終回)

根深 誠 (文筆家・釣り師・元登山家)

シバを愛玩し「めごこのシバこ」と呼んでいた。「めごこ」は津軽の方言で「めごい」つまり可愛いという意味である。「めご」だから愛護の意味もあるのかもしれない。それに接尾語の「こ」をつけて強調している。

「こ」をつける呼び方は津軽にかぎらない。東北地方で一般的に使われているようだ。「べごっこ」は仔牛をさす。「むすめっこ」は幼く愛らしい娘さん。津軽では何にでも「こ」つけて呼ぶ習慣が昔の人ほど多く見られる。例えば「林檎っこ」「酒っこ」「醤油っこ」「銭っこ」

「鮒っこ」「泥鰌っこ」「橋っこ」「家っこ」「電車っこ」「汽車っこ」など挙げればキリもないほどいろいろある。

「めごこのシバこ」は「こ」が二つついている。シバに対する可愛さ余った私の愛情表現である。そのシバが亡くなった。突然でありショックをうけた。シバの前に飼っていたコロの例もあるので、その哀しみははじめてではなかった。しかし、飼育係が二男だったコロの場合と異なりシバの飼育係は私だった。それだけに接する頻度やその密度に比例して衝撃は大きかった。

シバは十四歳で亡くなった。柴犬の平均寿命は十三から十五歳ということだから平均的な寿命ではあったと思う。それでも日々の散歩での歩き方を見ても極端に弱り果てた様子もなく、あと二、三年は生きてくれるものと漠然とだが考えていた。

死にいたる引き金になったのは熱中症と思われる。とくに猛暑がつづいたこの夏だった。それに耐えられなかったのだから抵抗力が弱くなっていたのかもしれない。

以下に、そのときの状況を日記『シバの散歩道』から転載し、これまで本誌に書き綴ってきた連載を終了したい。

2018 年 7 月 21 日 晴れ

昨日あたりからシバは食欲がないようだ。普段より少なめに肉、ちくわ、ご飯に大好物のカボチャを入れてやると時間をかけてゆっくり食べていた。食べたり食べなかったりは猛暑だからやむを得ない。しかし、これ

↓ダンボール箱に納められたシバの亡骸



が最後の朝食になるとは思いもしなかった。

午後になると暑さは三十℃を越し、シバはブナの木陰でぐったりしている。氷水で濡らしたタオルで体を覆い包んだり、股や腋の下を冷やしたりする。それでもぐったり寝込んでいるので午後 4 時前、家の土間に入れ、ふすまを開け放ち、クーラーを居間にかけ、冷たい空気が行き渡るようにする。

鼻から泡を出しているのときどき拭き取る。マダニが小豆大になっているのが、この数年来、夏になると目につく。

### 吾がシバの小豆虫とはマダニなり

#### 捕りて踏みつけ潰す夏の日

夕方、6 歳になる近所の子供が婆さんとふたりで魚肉ソーセージをもって遊びに来る。シバは玄関の土間に入っていたが、戸を開けてやると尻尾をふりふり、いつものようにじゃれついていた。「シバ、熱中症になったみたいで調子悪いから」と言って帰ってもらう。

日々のニュースによると西日本では熱中症で死者が続出していた。

22 日 曇

シバ、ぐったりして呼吸も苦しそうだ。今日は日曜日なので動物医院も限られている。長男がネットで調べたのだが二軒しかやっていない。だいぶ以前、フィラリアの予防接種を受けていた動物病院に長男の車でつれてい

く。ここの医者は態度が横柄で、飼主の不手際につけ入って恫喝を加える悪癖がある。それに料金も高いという評判。フィリアの予防接種で私も恫喝され、反撃しそうになったのを押さえるのに苦労した。まさしく悪徳医師だ。以来、行かなくなったのだが、いまは一刻も争う事態だった。診察室で顔を見てわかったのだが以前とおなじ医者だった。

飼主をとがめだてする性癖は以前と変わっていない。飼主が飼犬に愛情がないかのごとくとがめだてするのは、おそらく自らは犬を飼った経験がないからだと思う。医者に来ないからこんなことになったと私に罪をなすりつける。

血液検査、レントゲンを受けた結果、心臓、腎臓、肝臓も悪い、貧血、甲状腺もやられているとのこと。小便が詰まっていたので抜いたという。点滴をうける。シバはグーグーと呼吸音を出すようになった。ときどき痙攣もする。

薬が出るのを待つ間、待合室でシバを抱きつづけていた。腕がくたびれる。

### シバを抱き祈る心はシバ生きよ

#### シバ抱かれつつ虚空を見据え

一週間分の薬をもらう。シバの股間のふくらみは腫瘍だそうだ。入院すればいいような話だが、薬をもらい、様子を見ることとする。診察料をふくめてしめて 5 万 3490 円。高額なのでびっくりした。相場はわからないが、評判どおり高いのだと思う。

### 23 日 深夜雨、曇

シバはぜんぜん食べない。ときどきぺろぺろ嘗めるようにして水を少し飲む程度。それが精一杯の命への湿りなのか。いつものように腹が減った、散歩に行く、という合図はもはやしない。尻尾を垂れたまま、弱々しくぼんやり立ち尽くしていることがある。三、四日前までは元気だったのに。何を見ているのだろうか。冥界を見ているのだろうか。シバ、と声をかけると私のほうに顔を向けるが、その動作も緩慢で見ると忍びない。重くのしかかってくる不安、このまま死ぬのだろうか。声をかけ、撫でてやるしかすべがない。私は胃の調子が悪くなってくる。死は必然だから逃れられないとしてもせめてあと二、三年は生き延びられないものかと願わずにはいられない。

ない。

深呼吸するような呼吸の仕方、ときどきしゃっくりするように痙攣をする。

夕方、雨が降ってきた。雨の嫌いなシバは小屋に入るだろうと居間から見ていたが、地面から十数センチほど高くなっている小屋の入口に前足をかけたまま上れないでいた。這い上がる脚力も失せたのだろうか。私が出て行き、とりあえず抱きかかえて小屋の中に入れる。横たわり目を閉じていた。明日まで生きていられるのか不安になる。この不安がシバの命の正体なのだろうか。

朝夕、いつもはスズメたちが集まってくるのだが、シバが食欲を失くしているのですズメたちにも餌を与えずにいた。

シバを見ていて、わが家で預かった当初、一蓮托生で生きていこうと決意したことを思い出す。もしシバがここで死ねば、私の死期も迫っているのではないかという想念が浮ぶ。

長男とふたりでシバの口に無理矢理薬を入れる。錠剤を砕いて粉にし、私が口を開け、長男が薬を口に詰め込んだあとスポイトで水を垂らし込む。顎を動かし、飲み下している。しかし、衰弱しきっている。声を出す力もなさそうだ。小屋の入口に頭を落としたまま動かない。そのあと小屋に入って横たわり、こちらを見ていた。

カッコウの声が今日から聞かれなくなった。

### 24 日 曇 晴れ

朝、シバは小屋から出て、昨夜私が入口に置いた水を飲んでいて。立っているのも辛いらしく後ろ足が震えている。相当に弱っているようだ。速やかに小屋に入れなかった。後ろ足の蹴り上げる力が衰えたのだろう。二回目ですぐにか入ることができた。入口にマットを敷いて段差のないようにしてやる。

小屋の入口が日影になるようにブナとカラマツを支点にタープ張る。昨日よりもさらに衰弱しているようだ。独力で立ち上がれなくなり歩行も困難。立ち上がるとよろけて転ぶ。居間にクーラーを効かし、玄関に入れたら、立ち上がろうとして後ろに転んだ拍子に、がまんできなかったのか小便をした。出ないのではないかと心配していただけに希望がさす。外に出たいらしく玄関の戸を開

けるとよろけて転び、排便した。下痢気味で量はわずか。その色といい、21 日、最後に食べたカボチャのようだ。さっぱりしたのではないだろうかと思う。それとも断末魔の排泄なのか。

すっかり後ろ足が利かなくなってきたようだ。それでも独力で歩こうと立ち上がっては転ぶ。夕方、木陰の草地で寝ていたの、そのままにしていたら数日だが、独力で玄関まで歩いて来た。私が玄関を開け、土間に敷物を敷くとそこに倒れ込んでこん睡状態。それでもときおり立ち上がろうとして転ぶ。頭を打つので危ない。後ろ足が完全に利かないようだ。まったく食べていない。水はスポイトで口に垂らすだけ。薬も錠剤を潰して水といっしょに口に入れるが出してしまふ。時々刻々と衰弱していくのがわかる。明日は持つだろうか。

そういえばコロのときも死期が迫ったころネコが現れたが、ちかごろネコが現れるようになったのはシバの死期を察してのことなのか。

寝返りを打ちたいのか、上体を起こして立ち上がろうとするのだが転んでしまふ。ときどき抱きかかえて頭的位置を変えてやる。

10 時、涙を垂らして息苦しそうなのでふいてやったら突然暴れて痙攣し吐き出した。スポイトで何回にも亘ってやっとの思いで口に垂らし込んだ水を吐き出してしまふ。そしてぐったり寝込む。立ち上がろうとするのだが立てなくなっていた。外へ出たそうなので抱きかかえて連れて行くと寝そべて下痢した。すこしはさっぱりしただろうか。摩ってやると安心するのか、落ちつく。土間の敷物に寝かせ、上がり框の廊下で仮眠しながらシバを摩ってやる。

シバの死を夢と思いき夢なら

ずひたすら撫でて夜を明かす吾

名を呼べば声も出せずに尻尾ふり

身を横たえて吾をみるシバ

寝返りもできずに下痢をする

シバのいのち儚しく猛暑の夏に

25 日 晴れ

夕べはシバに付き添い、ほとんど眠れなかった。

早朝、シバに飲み水を与えようとスポイトの先端を口

に差し入れたとたんに叫び声を二回、発した。その異様な声は断末魔の叫びのように聞こえた。「構わないでくれ」と言っているようだった。黄色い鼻汁をティッシュでふき取ってやる。どうすればいいのだろうか。シバの死に私は向き合わねばならない。

散歩に行こうという催促の声、そのあとの食事を催促する声も聞こえなくなった。スズメたちも、餌を与えられないので来なくなった。すべてはシバを中心にしていたわが家の環境はどう変わるのか。味気なくなることは間違いない。息が詰まりそうだ。

午前 8 時 9 分、また断末魔の叫びをあげる。一回。

午前 9 時 24 分、断末魔の叫び、一回。

午前 9 時 28 分、断末魔の叫び、三回。

午前 9 時 46 分、断末魔の叫び、一回。

聞くたびに胸がえぐられるようだ。

午前 11 時までの間に、さらに四回。11 : 14 分 1 回、17 分 2 回、18 分 2 回、23 分 1 回、27 分 2 回、撫でないとすぐに泣く。28 分 2 回、29 分 2 回、31 分 1 回、34 分 1 回、35 分 1 回、36 分 1 回、胸でもかきむしるように足を突き出し、苦しそうな仕草。そのたびにシバと声をかけ、撫でてやる。37 分 3 回。38 分 2 回、39 分 3 回、45 分 1 回、48 分 1 回、50 分 1 回、51 分 1 回、54 分 1 回、56 分 1 回、57 分 2 回、58 分 1 回、12 時 1 分 1 回、2 分 1 回、3 分 1 回、5 分 3 回、6 分 3 回、7 分 3 回、8 分 2 回、9 分 5 回、10 分 3 回、11 分 6 回、12 分 2 回、ここで数えるのをやめる。

一日中、シバに付き添う。長男も交替で付き添い、4 時から仕事に行く。これが今生の別れと思ったようだ。その後、仕事先から様子を知りたくて電話をかけてきたが、このときは叫びつづけてまだ生きていた。その声を聞くほうも気が気でない。

シバ、苦しそうだ。ときどき、身体を反対向きにしてやり、胸部にあてがっている冷えたタオルを取り替える。毛並みがぼそぼそして艶が薄れてきた。

夜 7 時、私の食事中にシバ、二回、悲痛な叫びをあげる。抱き上げて頭の向きを反対側に変えてやる。こうすればしばらく静かになり、また叫び声をあげるとまた抱き上げて頭の向きを変えることを繰り返えず。ところが 7 時に頭の位置を移動させてから一時間経っても叫ばな

い。覗くと、健康なときに熟睡していたような寝息をたてている。闘い抜いた苦しみのあとの安らぎとでも言うのだろうか。この異変の意味に私は気づいていなかった。居間の襖を開けると土間であり、ときどき覗くと寝息をたてている。悲痛な叫びが聞こえなくなっただけでもありがたいがたかった。生きられないのなら、安らかに逝ってもらいたいと願わずにはいらなかった。

↓近所の子供(6歳)が描いてくれた  
シバと自分の絵



私が 9 時に確認したときシバは腹部を上下させて穏やかに呼吸をしていた。ありえないことだが回復に向っているかのようにも見えた。奇跡が起きてほしいと心の底から願っていたのかもしれない。

10 時、車の音がして長男が帰宅した。長男がシバの様子を窺いに行くと、開いていた口が閉じるかのようにわずかに動き、そのまま停止したという。

「ああ、シバが死んだ。呼吸が止まった」

長男の声に襖を開けて、妻と私もシバを覗き見た。最悪の事態を覚悟はしていた。胸部に手をあてがってみると心臓が動いていない。呼吸していない。シバは長男の帰宅を待っていたかのように息絶えたのだ。

「シバ、苦しかったべ。シバ」絶句するしかない。涙が流れ出た。胸が詰まるような喪失感、寂寥感に襲われる。親指のツメほどの糞が亡骸の後ろに落ちていた。死に際に排便したのだろうか。

**夏の夜の眞身に染おしづけさに**

**未魔過ぎ去りシバは息絶ゆ**

亡骸をそのまま放置しておくわけにもいかないので、長男が車でちかくのスーパーに氷を買いに行き、ついでに亡骸を納めるダンボール箱をもらってくる。まだ暖かみの残るシバの亡骸を抱きかかえ、氷を敷き詰めたダンボール箱に納める。シバ、切ない別れだ。

26 日 曇

**朝起きてシバ居なければ寂しかり**

**庭のふなの樹陰をおとしつ**

連載の原稿を書き直し、来春に出版計画中。本誌読者の予約を受付中

朝、シバがいなくなったわが家では、餌に群がるスズメの鳴き声も聞かれなくなった。これから先、歳月が埋め尽くしてくれるまで、さびしい日々を送らねばならないのだろう。ダンボール箱に納められたシバの亡骸が玄関の土間に安置されている。口をすこし開き気味に牙を覗かせ、目を閉じ、死に顔は安らかだ。

**過ぎてゆくシバの思い出散歩道**

**シバの亡骸焼き場にはこぶ**

家人が仕事に出かけたあと斎場に電話し、事情を伝え、長男の車でむかう。途中で買い求めた菊の花束を、シバが納められたダンボール箱に入れ、受付で手つづきを済ませたのち焼却炉の前にはこんだ。係員に挨拶し、シバを見納めた。

シバ、これが最後だ。また涙がにじむ。この哀しみの裏返しが、シバと過ごした充実の日々だった。失うことではじめて身に沁みてわかることだが、どんなにか、シバに支えられて生きてきたことか。常に、シバは私の一部であり家族の一員だった。

シバの亡骸を摩りながら無言で語りかけた。

シバ、何か忘れものしたんじゃないのか。私たち家族を置き忘れて逝ったのか。

シバ、十四年間、ありがとう。これからも、ともに生きていくよ。約束する。



↑わが家の庭にある  
コロとシバの墓